

石狩市浜益区^{おかしま}岡島にある「チャシ地名」と 「チャシ」に関する一般調査の概要

General survey report on "Chashi place names" and *chashi* in Okasima ,
Hamamasu-ku, Ishikari City, Japan

石橋 孝夫*
Takao ISHIBASHI*

キーワード：石狩市浜益区，チャシ地名，チャシ

はじめに

石狩市浜益区^{おかしま}「岡島」は同区^{もい}茂生とその南の川下の間にある南北 1kmほどの南北に長い海岸段丘の名前である。ここには南端付近に「チャシ地名」と両端に2つの「チャシ」があるといわれている。このうち「チャシ」については、若干の調査記録があるが詳しい調査はなされていない。

岡島は最高標高が 135 mほどで細長い海岸段丘である。西側一帯が切り立った海食崖で、簡単には接近できない地形環境にある。今回の調査ではドローンによる上空観察も試験的に取り入れ実施した。本報告では、並行しておこなったこれまでの調査記録や関係文献調査の結果についても記載した。今回調査では国土地理院地図、GooglEerth、石狩市 GIS、航空写真判読データなども利用しながら調査分析をおこなった。その結果、「チャシ地名」や「チャシ」の位置や構造の一部について把握でき、今後の調査についてある程度見通すことができた。

今回の調査ではドローン撮影については高橋俊

彦氏、航空写真判読データを提供してくれた宮塚義人氏、現地踏査では浜益区および石狩市いしかり砂丘の風資料館の方々、砂丘の風のご協力・ご支援をいただいた。

I 岡島海岸段丘について

最初に海岸段丘「岡島」の位置等について述べる。図1は今回の調査関連図で、明治30年に製作された地図上に、赤字で「岡島」等の位置を示した。このほかに黄金山や摺鉢山、毘砂別川の位置も示した。図2は毘砂別からの遠望で、画像右下の集落が浜益区川下である。

図3、図4、図4は二つのチャシの遠望と地図上の位置と南北方向の地形断面図である。チャシが立地する場所は二つとも標高 60m 前後である。地形断面図は国土地理院地図断面作成機能を使用して作成した。

* いしかり砂丘の風資料館（学芸協力員） 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

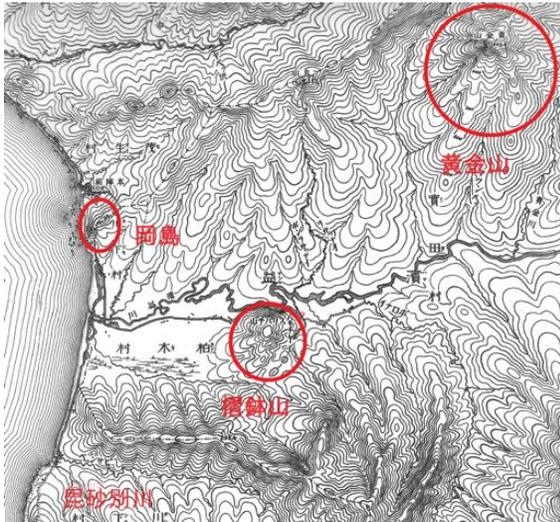


図1. 岡島の位置 (北海道廳 1887)



図2. 岡島の位置 (筆者撮影)



図3. 二つのチャシの遠望 (撮影筆者)



図4. チャシ(○)と地形断面(国土地理院地図)



図5. 岡島チャシ・川下チャシと岡島段丘

Ⅱ 「チャシ地名」と「チャシ」について

「チャシ地名」とは簡単にいうと「チャシ」という語を含む地名のことである。ただ、必ずしも「チャシ」そのものが現存するだけでなく、かつて「チャシ」が存在したことを示す痕跡的地名も含む場合がある。「チャシ地名」は小林和夫(1980)によるものである。浜益区の「チャシ地名」場合、図6の例のほか「摺鉢山」に付近にもあるという研究者や「チャシ」そのものがあるという研究者もいるが所在は確認できていない。表1は宇田川洋(宇田川, 2006: 18)の北海道の「8世紀以降の文化対比」である。筆者も「チャシ」については宇田川のような年代観をもっている。「チャシ」はアイヌ文化の所産で「砦」とも称されるが、その性格は十分明らかになっているわけではない。また発祥時期は不明だが、18世紀ごろには造られなくなった遺構とみられる。「チャシ」は北海道全域に分布するが、大まかな傾向として日本海側では少ない遺跡といわれている。立地的には岡島の二つの「チャシ」もその例にもれないが崖などに面するなど一般に急峻な地形にあり、溝などで区画される場合が多い。

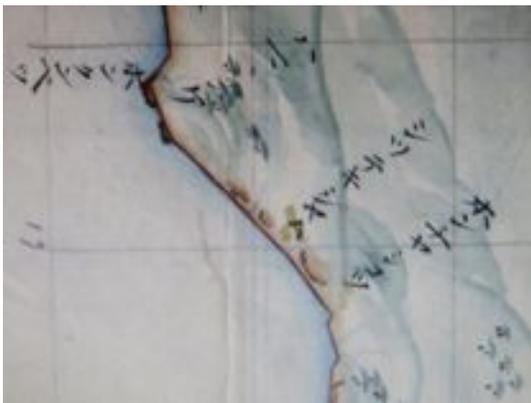


図6. 岡島のチャシ地名「ホンチャシコツ」『国土地理院古地図コレクションサイト「伊能大図 増毛」

表1. 8世紀以降の文化対比(宇田川, 2000)

	本 州	北 海 道
20	明治	明 治
19	江戸	江 戸
18		チャシ文化
17	戦国	(アイヌ文化)
16	室町	
15		鎌倉
14	平安	
13		奈良
12		
11		
10		
9		
8		
世紀		

Ⅲ 岡島の「チャシ地名」について

次に岡島の「チャシ地名」について述べる。図6にしめしたが、この地名は「伊能大図 増毛」のなかにみられる。伊能図とはいうまでもなく文政4(1821)年の完成の伊能忠敬らによる日本地図である。このなかの岡島にあたる部分に「ホンチャシコツ」と表記された地名がある。その北には「シツテキヤム」(現在の茂生)とあり、この地名が川下側にあったことは明らかである。ちなみに、この二つの地名の間に海岸に張り出す茶色の半円が描かれている。この半円上には縦に短い線何本も描かれ、崖状の地形を示しているとみられる。この表現と地図上の位置から見て、茶色い半円は「岡島」の海食崖を示したものとみられる。なお「ホンチャシコツ」とは「ポンチャシコツ」と考えられ、「小さなチャシ跡」の意味と推定される。

岡島の南側のチャシは現在「川下チャシ」のみが知られており、他のチャシは未確認である。さらに付近の確認調査の必要はあるものの、この「チャシ地名」は現時点では「川下チャシ」にあたる可能性が高いと筆者は考えている。しかも「チャシコツ」という地名から記録された時点ですでに「廃絶されたチャシ」の意味とも考えることができる。このような考え方をすると、このチャシは浜益川周辺にアイヌが暮らしていた宝永期までであったもので、その後、茂生に強制移住させられたため廃絶を余儀なくされたチャシの可能性はあるのはなかろうか。とすればこのチャシは伊能図に記録される100年以上前からあったチャシと考えることもできる。

IV 岡島以外の「チャシ地名」について

ここで岡島以外の「チャシ地名」について述べる。まず初めは金田一京助の「チャシ地名」である。同氏は「アイヌの詞曲にいて」のなかで「石狩川の河口から十里ばかり北、浜増毛という所の近傍にピサンベツという川がある。これがアイヌ語トメサンベツの日本訛で、その側に聳えてある黄金山・摺鉢山の辺にチャシコツ(Chashkot)「城跡」の義」という地名もあるのは、即ちユカラカムのシヌタプカの城跡で、浜に峙つ柱状の巖石は、その浜見の櫓だったという。」(金田一、1961: 136・初出大正7年)と述べている(下線筆者)。この記述からは黄金山・摺鉢山の周辺に「チャシ地名」があったことになるが、この地名は未確認である。

次にあげるのは宇田川洋のいう「チャシ地名」で『増補改訂アイヌ伝承と砦』(宇田川、2005: 46-47)の中で「オハキチャシ」という伝承上のチャシに因む地名が摺鉢山付近にあるとしている。この根拠は明らかでないが陸地測量部の地図(図7)に示したようにスリバチ山の東側に「ヲハキチャン」という地名が存在する。あるいはこれが該当

するのかも知れない。ただ、この地図の記載がその根拠とすれば「ヲハキチャシ」ではなく「ヲハキチャン」と記載されていると考えられ、「アイヌ語地名」ではあるものの「チャシ地名」ではないと考えられる。

なお、山田秀三は北海道の地名の中でこの付近の地名に「オハキイチャン川」という地名があると書いているだけで、この付近の「チャシ地名」や「チャシ」には触れていない(山田、2000: 119)。

このほか、金田一京助、河崎宏太郎は「黄金山」や「摺鉢山」付近に「チャシ」あるいは「チャシ地名」に類するものがあるとしているが、それらの位置は今回の調査では明らかにできなかった。とくに河崎宏太郎は『ユーカラのふるさと』(河崎、1982: 130)のなかで、「摺鉢山の山頂の岩が削られている場所に砦址がある」と書いている。筆者は20年近く前になるが、当時の村営スキー場から摺鉢山の稜線を西から東に踏査したことがあったが、この時にはチャシを思わせる地形の変化には気づかなかった。



図7. 摺鉢山のチャシ地名? 「ヲハキチャン」(明治30年陸地測量部地図)

V 「岡島（岡嶋）チャシ」に関する調査記録と文献

岡島チャシは海岸段丘「岡島」の北端近くにある「チャシ」とされる遺構であるが、発掘調査による確認は行われていない。また埋蔵文化財登録台帳では「岡嶋チャシ」となっているが現在は「岡島チャシ」の方が一般的のようであるので「岡島」と表記する。

本題に入る前に幕末期の絵図で当時の岡島の姿がうかがえる絵図が2点あるので先に紹介しておきたい。2点とも函館市立中央図書館所蔵図である。

図8は嘉永2(1849)年に描かれた「西蝦夷道中見取図」のなかにある岡島の北端の姿である。図の左端に運上屋、その斜め上に戦前まであった「稲荷神社」が描かれている。図には「濱マシケ本名ベルカルウシ 運上屋 本マシケ迄 海上八里十■■」と添え書きとともに、その右に岡島チャシの位置する岩山と遠くにアイカフ岬(愛冠岬)も描かれている。この図からみると岡島の状態は現在とそれほど大きな変化がないように見える。

図9は安政元(1854)年描かれた「蝦夷廻浦図」の一場面であつての浜益区茂生の運上屋とその背後の「岡島」がひとときわ高く描かれている。この図は掘織部正熙の調査に随行した若干19歳

の会津藩の絵師一ノ瀬紀一郎(雑賀重村)が描いた図の模写である。大型和船の背後にある岩山が「岡島の北端」である。なお和船の帆の背後付近が現在の「岡島洞窟遺跡」にあたる。

1. 文献 河野広道の「北海道に於ける洞窟遺跡」(河野 1932)

今回調査した限りでは、このチャシに関する最も古い記録は河野広道の「北海道に於ける洞窟遺跡」と思われる。それによると「洞窟のすぐ上には丘の先端を溝で仕切ったチャシあり」(河野 1932:91)と記している。ここでいう「洞窟」とはいうまでもなく「岡島洞窟遺跡」のことであり、この記録から昭和初期には「チャシ」の存在が知られていたことがわかる。



図8. 西蝦夷道中見取図 濱マシケの一部(函館市立中央図書館)



図9. 蝦夷廻浦図 茂生及び岡島の部分(函館市立中央図書館蔵)

2. 文献 北海道石狩國浜益村岡島洞窟遺跡」(杉山 1936)

次は昭和11(1936)年の杉山壽栄男が書いた「北海道石狩國浜益村岡島洞窟遺跡」(杉山 1936: 356)で、その報告のなかで、このチャシについても記載している。杉山はこの年「岡島洞窟遺跡」の調査で浜益を訪れ、その調査報告を書くがその中で付近の遺跡も記載している。それによると「A点は岡島洞窟 B点はAの頂で僅かに溝をなしてここにも石器類が散布し、昔の城砦と伝えられている」(下線筆者)と書いており、この記述は岡島チャシを指していることが明らかである。

3. 調査記録 北海道教育委員会による埋蔵文化財の所在確認帳調査

このチャシの最初の調査は昭和47(1972)年9月、北海道教育委員会埋蔵文化財の所在確認調査と思われる。この調査により、遺跡として包蔵地台帳に登録される。

埋蔵文化財包蔵地カードの記録では「種別 チャシ跡 名称 岡嶋チャシ 登録番号 A・10・63 地番 浜益郡浜益村茂生」「立地 岡島洞窟上の台地に有るチャシ 形式 丘頂式」となっている。なお「丘頂式」とはチャシの形態分類の一つで独立丘のような地形につくられたチャシの意味であるが、図10に示したように調査略図には北側に張り出す三角形に近い地形が描かれている。さらに「西側の崖面から東に直線的な溝」も描かれている。また、このチャシの情報提供者の氏名も記載されている。

4. 調査記録 測量調査

このチャシは昭和51(1975)年9月に測量調査が実施されたという。調査者は北海道教育員会であるが側聞すると測量図面等の存在は明らかでないという。

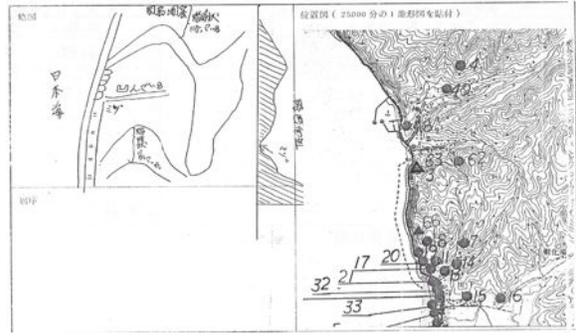


図10. 埋蔵文化財包蔵地台帳の略図と位置図(▲63が岡島チャシ)

5. 文献 日本城郭大系第一巻 北海道・沖縄」(藤本・名嘉編 1980)

昭和55(1980)年岡島チャシは川下チャシとともに『日本城郭大系第一巻 北海道・沖縄』に紹介される。この本の記載では「茂生チャシ」という別称があったことも記載されている。チャシについては「チャシは、日本海を足下に望む崖上、山林中であって、現在一条の弧状の壕がめぐらされている。しかし、未調査であって、伝承もないので構築時期・機能などは不明であるが、背後は山地、前方は海に画され、しかも見通しが良いので、防御としての機能が考えられる。」(福田, 1980: 132)と記載されている。図11は同書に掲載された岡島チャシの遠景写真で北側の茂生市街から撮影され「112北側からみた岡島チャシ」と解説がついている。この写真には赤の円内で示したが「V字形に窪んだ地形」がみえる。現在、ほぼ同じ位置から撮影しても樹木の繁茂でこの地形は見えない。図12は昭和46(1971)年発行された『浜益村小史』(吉田・石橋源, 1971: 6)の「起重機によるニシン揚げ」と題された写真には同様な地形が写っている。この写真の撮影年代は明らかでないが昭和初期と思われる。

6. 文献 『ユーカラのふるさと』(河崎宏太郎, 1982)

昭和57(1982)年発行された河崎宏太郎の『ユーカラのふるさと』P24には「洞窟の上には稲荷神社があり、城壁のようにそびえる断崖の頂上には

チャシコツの跡があって、外側に溝が掘られている。」と記されている。

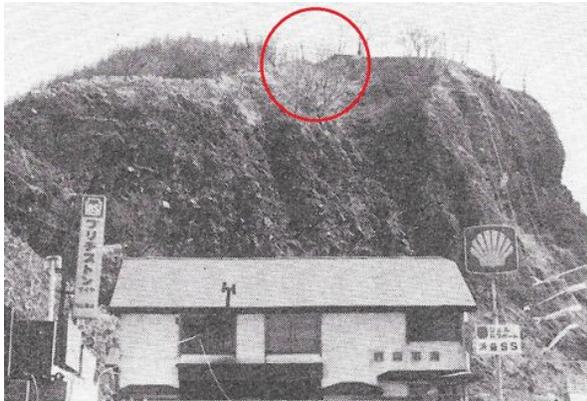


図 11. 岡島チャシの溝 (福田, 1980)

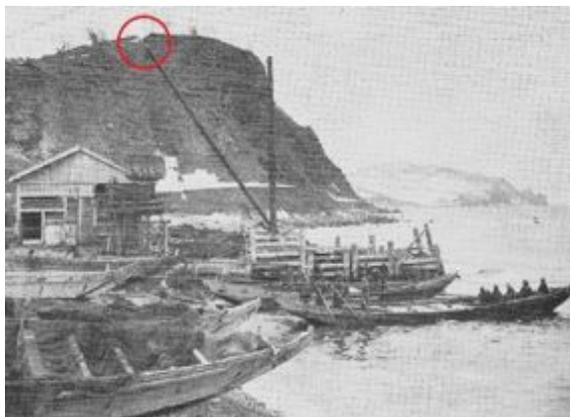


図 12. 円内にV字の溝 (吉田・石橋, 1971)

7. 文献 『北海道のチャシ』 北海道教育委員会(北海道教育委員会 1983)

次も文献記録で昭和 58(1983)年に発行された『北海道のチャシ』の北海道内チャシ一覧表に P10 に「岡嶋チャシ 面崖式(丘頂的)弧状一条」と報告される。

8. 調査記録 平成 21 年の筆者(石橋)の現地調査

平成 21(2009)年 4 月 20 日筆者が表面調査を実施した。チャシに至る登攀ルートは浜益支所から西側にある「茂生 1 の沢川」を横切り、市道に面した崖の縁を南向かって登攀。途中「岡島洞窟」の上部をとおり遺跡に到達した。図上で測ると距離的には 250m あまりの距離であるがチャシは

標高 60 m 近い場所に位置している。この調査ではすでに図 11・12 に示した溝にあたりと考えられる V 字形の溝状地形が確認された(図 13・14 図)。大きさは巾約 3m 深さ約 2m, 長さは 10m ほどである。図 13 の右側の高まりの陰で溝は西側にカーブしている。この溝は西側の崖面に向かうにつれ不明瞭になる。図 14 は溝の北端近くで北向きに撮影したもので、画像奥の白い建物がコミュニティセンター。手前の青い四角い屋根が海鮮食堂である。なおこの調査では昭和 47 年の調査で記録された西側の崖からはじまる「溝」は確認できなかった。この調査時点で西側(国道 231 側)の崖面では「落石防止ネット」の工事が行われていた。



図 13. チャシの溝 北→南(筆者撮影)



図 14. チャシの溝北→南に撮影(筆者撮影)

Ⅶ 令和5年(2023)の調査結果と今後の課題

今回の調査結果について概要を述べる。筆者らは3月31日にドローン撮影調査、4月11日に現地踏査。その後も10月・11月にドローン撮影などを実施した。並行して文献調査も実施し、その結果は前記のとおりである。また4月の現地調査では複数の同行者があり、チャシの溝の再確認ができた。

今回の調査のうちドローン撮影調査では、岡島チャシのある崖の上は樹木がかなり密に繁茂しており、溝の状態など当初期待したような成果はえられなかった。しかし図15～19に示すように岡島洞窟遺跡を含めたこの遺跡との相対的位置や立地の再確認ができたことは大きな成果である。

また補足として図15に示したように溝は小さな頂を取り囲むように西側に向かってカーブしていることがわかった。ただ、その先は徐々に不明瞭になり確認できなくなる。昭和47年の調査では、北側の溝は未確認で逆に西側の溝があり、これが「チャシ」と判断した根拠となっていたが今回の調査でははっきりしなかった。

しかし、今回は滑落の危険があるので崖上からは確認できなかったが、国道231を挟んだ「百年記念」の石碑付近から撮影した画像(図16)では、西側の崖面にV字の溝状地形がみえるものがあり、あるいはこれが昭和47年の溝の一部に相当する可能性がある。

以下に今回の調査で確認できた岡島チャシの位置情報等を示しておく。まず、図17は国土地理院地図の3D機能で作成した岡島チャシの立地イメージである。この図からもわかるようにチャシの立地は崖の先端部にある。ただし突出部周辺は崩落の危険性があり接近は危険である。図18は岡島チャシの平面的位置である。このチャシの位置については従来、一部不正確な点があった、この図からチャシのある場所は北を頂点とし、西側と東側が断崖で位置する場所の平面形は三角形に

近い。図上で計測すると南北45m、東西53m程度ある。

このチャシの年代は不明であるが、「チャシ地名」や「川下チャシ」の項でも述べるように宝永3年の強制コタン移住にともなって代替再建された新しいチャシの可能性も考える必要がある。現時点でチャシがどのような性格なのか明らかになっていないがチャシ設置の目的は不明であるが、川下チャシの代替的な性格とすれば集落にともなう施設であると考えられる。またと同様に北から西の海上が一望に見渡せる場所にあり、こうした眺望もこの位置にこのチャシが設けられた理由の一つとも考えられる。



図15. チャシの溝 南→北(筆者撮影)

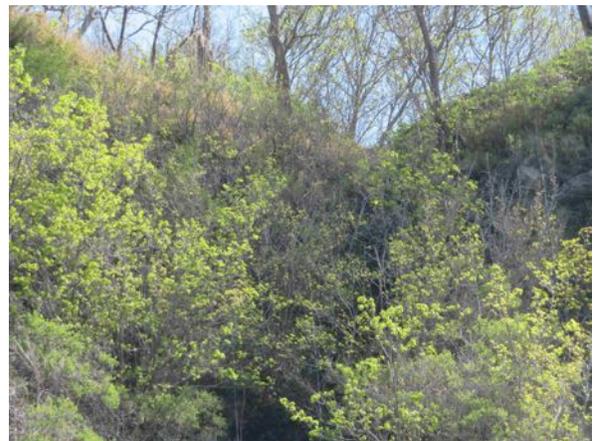


図16. 西側崖面の溝? 西→東(筆者撮影)



図 17. 岡島チャシの3D地形図



図 18. 岡島チャシ平面的位置



図 19. 岡島洞窟遺跡と岡島チャシ

Ⅶ 川下チャシに関する調査記録と文献

次に川下チャシに関する調査記録と文献，令和5年度の調査結果について述べる。

1. 文献「伊能図」のチャシ地名

川下チャシに関連してはすでに紹介した伊能図の「ホンチャシコツ」という「チャシ地名」がある。これが「川下チャシ」を指しているとするれば「川下チャシ」の最初の記録の可能性がある。また，すでに述べたように宝永3年(1706)の強制移住にともない廃止されたためできた「チャシ地名」の可能性があるととも考えている。

2. 文献「西蝦夷道中見取図」(嘉永2(1849)) 函館市中央図書館蔵

図 20 は，川下チャシは描かれていないが岡島の南端の地形が良くわかる図である。これは嘉永2(1849)年の「西蝦夷道中見取図」で，最高標高 135 m のピークも描かれている。この図では岡島と東となりの段丘の谷間に山道が赤で描かれ「山道口を濱マシケ迄凡三十丁」とある。次に述べる荘内藩ハママシケ陣屋絵図に注記された山道の距離とは倍近く長い距離が記載されている。なお明治30年の陸地測量部の地図では茂生にむかう道は岡島の南端からすぐ岡島を登るような道となっており，陣屋建設にともなって新たに道路が作られた可能性がある。



図 20. 西蝦夷道中見取図 瀆マシケの部分
(函館市立中央図書館)

3. 文献 荘内藩ハママシケ陣屋の絵図

図 21 は文久元(1861)年から「岡島」の南東の山蔭に建設がはじまった「荘内藩ハママシケ陣屋」の見取り図の一部である(吉田 1971:表紙)。この図では陣屋は図の右上隅に一部が見えている。図の人家の前に浜益川(当時黄金川)が描かれている。その北西にある手前側の山頂に「小屋と吹流し」が描かれた小山が描かれている。小山は浜益川河口右岸にあり、岡島であるとは明らかである。また、その少し東側に「字カワスモ・ヘロカルウシ」の標柱があり、そこから運上屋へ向かう道がみえる。

この道は図 20 の「西蝦夷道中見取図」に絵描かれた山道と同じであろう。この図の「吹流しと小屋のある山」は陣屋関係の施設とみられ、次項 4 で述べる「烽火台及ヒ台場」にあたる可能性がある。図 22 に示した陸地測量部の地図では、この山道とは別の岡島に南端から直接、川下チャシに向かう道がみられる。この道がいつつくられたか明らかでないが「台場」も建設されたとすると、この道は本来、陣屋建設に伴って新たに開削された道とみることもできる。またこの図の右端に海食崖の一部があり、その上方に一段高いピークが描かれている。この山は岡島の標高 135 m のピー

クにあたる可能性が高い。なお、次項 4 や浜益では項目 12 で述べるように「川下チャシ」がアイヌ文化の所産でなく「荘内藩ハママシケ陣屋」関連の施設だという聞き取りがある。現在、川下チャシを含めた部分は国指定地内に含まれているが、その報告書をも「見張り台」があったとされているだけで、この絵図にある施設に相当する説明はない。

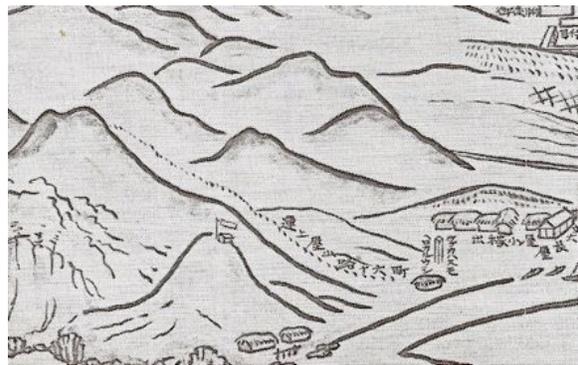


図 21. 浜益村川下史跡荘内藩陣屋之図(吉田 1971)

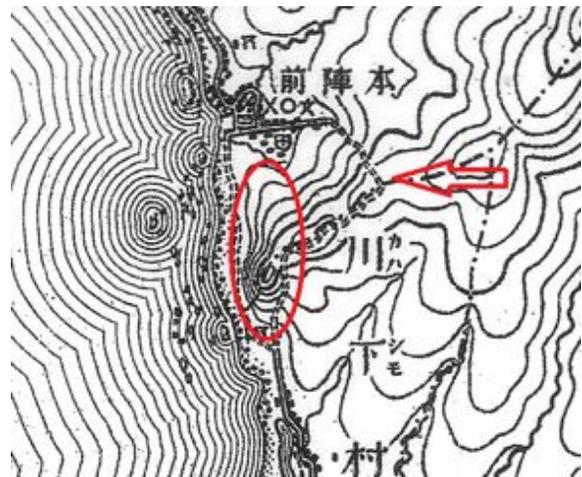


図 22. 陸地測量部地図「茂生」

4. 文献 「北海道殖民状況報文石狩國」河野常吉ほか 1987

次に前項 3 に関連して「北海道殖民状況報文石狩國」に記載された荘内藩ハママシケ陣屋の付属施設について述べる。この報文が作成された詳しい年月日ははっきりしないが、明治 30～33 年頃とみられる。ただ印刷され一般に広く知られたのは(昭和 62(1987)年)のことである。この報文によると「浜益郡」の項に「陣屋ヲ浜益川北

方ノ高台ニ設ケ烽火台及ヒ台場ニケ所ヲ其附近ニ築キテ」(p149)と記され、また同書の「川下村」の沿革の項でも「(陣屋の)北方茂生村ニ接スル高台ノ地ニ烽火台及ヒ台場ニケ所ヲ設ケタリ」(p157)と述べており、これらの施設が岡島に設置されたことが読み取れる(下線筆者)。図22は明治30年の陸地測量部地図の「茂生」(北海道廳, 1887)の一部で、赤の楕円が「岡島」である。また川下村側の南端付近から「本陣前」という地名に向かって平行な破線がみえる。

この線が「本陣前(現在の浜益支所付近)」向かう道である。しかし、前項2で述べた点や航空写真などから検討すると、新たに設置された可能性があるように思われる。

この点については今後の検討課題の一つである。

「川下チャシ」の位置は現在の地図と比較しても赤の楕円内にある南側の高地にあたりとみられ、図21に掲載した「吹き流しのある小山」がこの高地にあたるのではなかろうか。図23は現在の地形図で青丸内が川下チャシの位置である。この付近で標高の高い部分は川下チャシの北にある標高135mのピークで図21にも描かれている。今のところこのピークにのぼるための道路はないようで「見張所」には適しているものの「台場」としては大砲などをあげるには急峻すぎると思われる。

この点はさらに現地踏査で確認する必要がある。台場に関連して荘内藩の重火器の装備について具体的には把握できていないが、文久元年に箱館奉行所が蝦夷地の荘内藩の軍備を調査した記録があり、そのなかに「右之外大砲並小砲数挺当秋中庄内より船積差下候処、津軽領於森山辺破船いたし申来候ニ付猶又明春夫々為積下候積ニ御座候」(吉田・石橋, 1971:21)とある。

その後、ハママシケ陣屋に大砲が実戦配備されたどうか確認できないが、少なくとも当時荘内藩が最新の重火器を入手し蝦夷地防にあたりとうし

ていた様子が窺えよう。

筆者には台場の造成や構造等に関する知識は全くないが、大砲の種類によってもその構造は異なるのだろう。今後、台場や荘内藩の軍装備について調査する必要がある。



図23. 川下チャシ, 見張所推定位置

5. 文献 北海道に於ける洞窟遺跡 河野広道, 1932

川下チャシに関する最初の考古学的記録は河野広道の「北海道に於ける洞窟遺跡」(河野 1932:91)であろう。それによると「又同村字川下にも同じ岡島の續きに一チャシがある。」と書かれており、昭和7年には「川下チャシ」は「岡島チャシ」とともにその存在が知られていたことがわかる。

6. 文献 北海道石狩國浜益村岡島洞窟遺跡 杉山壽栄男, 1938. 東京人類学会

1938年、岡島洞窟遺跡の調査に訪れた杉山は「北海道石狩國浜益村岡島洞窟遺跡」のなかの「浜益川河口に於ける石器時代遺跡の概要」(杉山, 1938:356)で「D点は山上に溝を廻らしてあって城砦と云われているが遺物は判然としない。」と書いている。この記載と遺跡分布図の対応関係からみてもこの「山上に溝を廻らしてあって城砦と云われている」遺構は「川下チャシ」であることは明らかである。

7. 調査 昭和51年北海道教育委員会の測量調査

昭和51(1975)年9月に北海道教育委員会により測量調査が実施されている。測量原図は目にすることがないが、後述する『北海道のチャシ』『日本城郭大系第一巻』などに掲載された「川下チャシ要図」がこの時の成果の可能性が高い。また同時期に制作されたとみられる16mmフィルム「北海道のチャシ」(北海道プロダクション, 1976)のなかで川下チャシの遠景や平板測量のようすが収録されている。撮影は1975年に行われたとみられる。

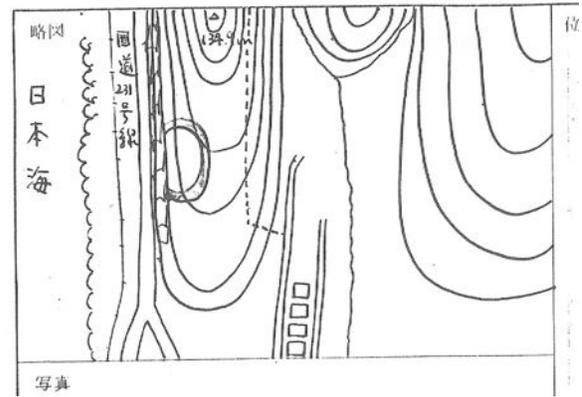


図24. チャシ略図(埋蔵文化財包蔵地台帳カード)

8. 調査 昭和52年北海道教委の埋蔵文化財調査

川下チャシは昭和52(1976)年、埋蔵文化財包蔵台帳に記載され、正式に遺跡として登録される。それによると「種別 チャシ跡 時代 アイヌ 立地 海岸段丘 標高60m 規模およそ30×20m 600m² 形態 崖面に開口したC字の空壕を一条もつ面崖式・お供山式のものと記載がある(下線筆者)。また調査文献の項に「昭和51年9月27日～10月2日 道教委 測量調査実施(埋蔵文化財包蔵地台帳 川下チャシ)となっている。また、この遺跡の存在は地元の方の情報提供によるものとみられ、この方の名前も記録されている。図24は埋蔵文化財包蔵台帳の略図、図25は同年の登録通知文書に添付されたチャシの写真の白黒コピーである。写真の撮影位置は川下チャシ背後にある標高135mのピーク付近とみられ、チャシの奥に愛冠岬が写っている。

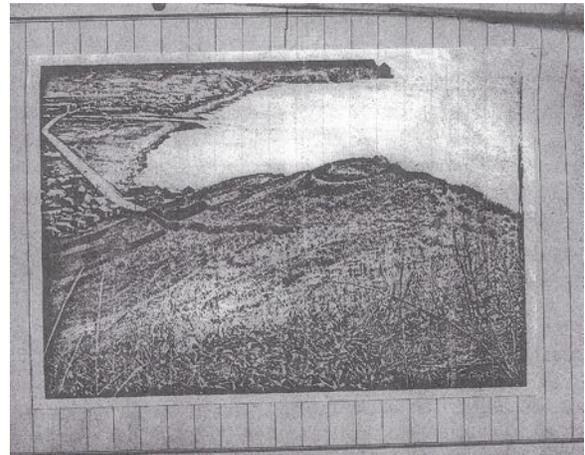


図25. 川下チャシ白黒コピー

9. 文献 『北海道のチャシ』(北海道教育委員会, 1983)

前掲7で述べた測量成果は『北海道のチャシ』(北海道教育委員会, 1983: 40)に利用されたと思われる。掲載図が図24がそれで「川下チャシ跡実測図」として掲載されている。図27はその一部で、チャシ周辺を切り抜き編集したものである。この図では溝は崖面に接する南北2か所にだけ

みられ、つながっているようには見えない。この見方が正しいとすると、この本にp11に掲載されている「北海道内チャシ一覧表」中にある「⑦壕の形、構造状の特徴:C字状、1条」の記載とは相違があるように見える。またこの図は昭和55(1980)年の『日本城郭大系第一巻』(藤本・名嘉編, 1980)に一部改変され利用されたとみられる。また図25に掲載した白黒写真は、この画像がいつ撮影されたか不明であるが、前掲6で記載した16mmの「北海道のチャシ」のなかに同じショットが出てくるのでおそらくこの調査の際に撮影されたと考えられる。この写真は川下チャシの北東側の高地から撮影されたとみられる。この画像からは東南に傾斜したチャシの全景と下段の深い溝と上段の浅い溝らしい痕跡がみえる。この画像からチャシには2本の溝があることが推定される。さらに注目されるのは上段の溝は北東側

が一部途切れているようにみられ道のようにもみえる。前掲の図 22 の陸地測量部の地図などではチャシの東を通る旧道がチャシの部分で二股に分かれてるようなものもあり、この部分に出入口があった可能性もある。

10. 文献「北海道のチャシ」藤本英夫、

1977(『日本古代文化の探究 城 上田正昭、編 1977』

この論文の中で藤本は川下チャシを取り上げ、道東、釧路町の「遠矢第二チャシ」と同形式のものでは無いかと述べている。なお藤本は遠矢第二チャシの形式を「アルファベットのCを描いたような空堀が崖面に開口しているもの」(藤本 1977:165)と考えていたようである。ただ、川下チャシは未調査であり、後述するように荘内藩陣屋の付属施設という話もあり、今後さらに検討が必要である。

11. 文献 日本城郭大系第一巻 川下チャシ(藤本・名嘉編 1980)

昭和 55(1980)年川下チャシは岡島チャシとともに『日本城郭大系第一巻』(藤本・名嘉編, 1980:133)に掲載される。川下チャシの執筆は藤本英夫氏によるものである。

また巻頭の口絵にカラー写真 15(図 26)が掲載されている。また「川下チャシ要図」(藤本・名嘉, 1980:133)(図 27)は「北海道教育員会提供」となっている。なお、図 26 は映画「北海道のチャシ」にも類似のカットがあり、通常のカラ写真にしては画像が荒いのでこの 16mm フィルムからコピーされた画像の可能性がある。

ただ図 27 の測量図は、図 26 の画像と同じ遺構かと目を疑うほどで、大きく印象が異なる。記載は「⑤山城、⑥土塁・空堀 ⑦ 25 m×60 m ⑧標高 60 m」となっており、7 の調査記録とは異なっている。図 26 で注意されるのはチャシ左下に旧道と思われる道も見える。また⑥遺構の項に「土塁・空堀」と記載しており、「土塁」もと

もなうチャシと認識されていたらしい。



15 川下チャシ

図 26. 川下チャシ(日本城郭大系藤本, 1980)



図 27. 川下チャシ要図(日本城郭大系藤本, 1980),

12. 文献 『ユーカラのふるさと』(河崎, 1982)・『「ユーカラ」への慕情』(河崎, 1986)

この 2 冊の小冊子はいずれも浜益の地方史研究者河崎宏太郎の著書で、前者は昭和 57(1982)年、後者は昭和 61(1986)年に自費出版されている。このなかで川下チャシに関する聞き取りが掲載されている。聞き取りした年月日は不明であるが、万延元年の荘内藩陣屋造成に関する古老の言として『ユーカラのふるさと』では「岡島の山上に大筒を備えた跡」,「岡島の川下寄りの高台に大筒を備える箇所をつくり」(p110 下線筆者),「大筒を備付けたところに建築した家の屋根は方屋根だったと云われ」(p 111),「アイヌ人ばかり使役して要塞を築設したので、要塞の外側に、アイヌ人のチャシ(城)をつくるのと同じに「く」の字形の深い壕を掘りめぐらしてつくり」という聞き取

りがある。

『ユーカラ』への慕情」p15では「アイヌの人は、チャシコツのように壕を建て物の周りに掘り、この場所をチャシコツと呼んでいたといわれている。」という聞き取りも記載している(下線筆者)。この聞き取りは陣屋築造にかかわった人の子孫から聞いたもので、かなり信ぴょう性の高いものとみられる。

この証言からは「川下チャシ」は「チャシ」ではなく、幕末期の軍事遺構という解釈が成り立つことになる。ただ次項14で述べる史跡指定の報告書にはこうした情報は記載されていない。当時、史跡指定の過程でこの情報がどのように取り扱われていたかについては不明である。また「この場所をチャシコツと呼んでいた」(ユーカラの慕情p15)と情報もある。単にチャシと類似した構造から比喩的にこう呼んだ可能性もあるが、すでに「チャシ地名」の項で記載したように「ホンチャシコツ」という地名が「川下チャシ」を指している可能性も考えられる。もともと「川下チャシ」があり、その後荘内藩陣屋の台場等が築造される際、チャシが再利用された可能性も考えられる。この点については発掘調査による構造確認等が必要で今後の課題である。

13. 「荘内藩ハママシケ陣屋跡」1983年国史跡指定

昭和63年5月17日「荘内藩ハママシケ陣屋跡」国史跡指定告示、指定範囲には「川下チャシ」が含まれている。

14. 文献 平成4年『史跡荘内藩ハママシケ陣屋跡平成元年・2・3年度保存計画事業報告書』(北海道 浜益村教育委員会 1992)

この報告のP56には次のような記載がある。「陣屋から日本海への見通しは限られているが、陣屋西北方の日本海に直接面した山嶺上に吹流しを描いた絵図があり、愛冠岬から雄冬岬までの日本海の展望が開けたその地が見張台として機能してい

たことが知られる。この山嶺頂部には北海道でも日本海側に希少なチャシ(川下チャシ)も存在し、その地形は良好に保存されている。」(下線筆者)。ここでいう「吹流しを描いた図」というのは3で述べた図21のことであるが、見張り台と「チャシ」との関係については触れていない。図28に同報告書掲載の「見張り台」の航空写真を示した(浜益村教委宇久委員会、1992:56)。「見張り台」の文字の部分に南北にある道は「本陣前に向かう道」とみられ、茂生にむかう山道とは別の可能性がある。なお赤字の「川下チャシ」の表示は筆者が追記したものである。

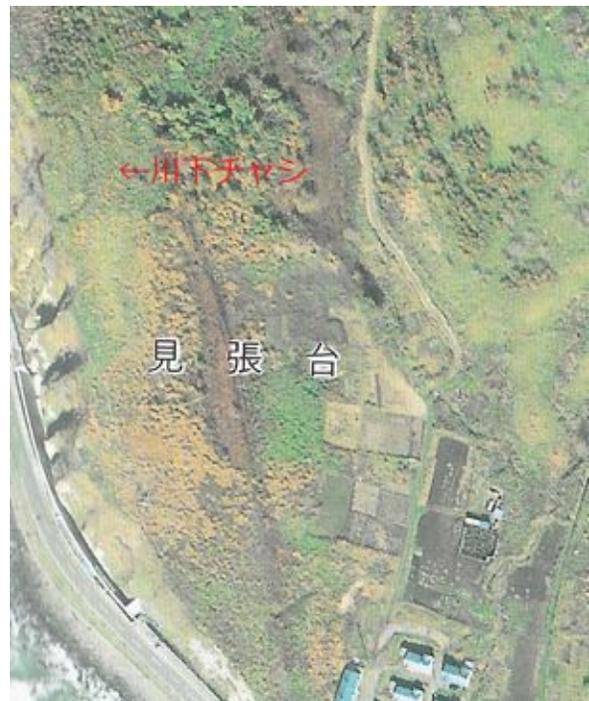


図28. 見張り台と川下チャシの位置(北海道 浜益村教育委員会、1992に加筆)

15. 調査 宮塚氏による航空写真判読

図29, 図30 空撮から見た川下チャシの形状について述べる。まず図29は平成30(2018)年宮塚義人が判読した「川下チャシ」の形状である。判読は昭和52年国土地理院の航空写真からおこなった。この判読では外周に幅広いに盛り土状のものがあ、その内側に長方形の平坦面があることがわかる。標高は60~61mにあり、西側が崩落していることがわかる。

また図 30 は国土地理院地図の「作図 3D 機能」で作成した南北方向の川下チャシの姿である。枠内がチャシで、見えづらさが外周に二本の溝状のものが見える。外側は盛土で一番外側の溝の排土の堆積と考えられる。内側の一本が宮塚図(図 29)で示されている盛り土の外周がみえているものとみられる。なお図 29 は国土地理院が昭和 52 年に撮影した航空写真を基に Stereo Metric Ver. 8.0 を使用して図化したものである。



図 29. 浜益川下チャシ跡航空写真判読図 (*宮塚 2018)



図 30. 川下チャシ 3D

Ⅷ 令和 5(2023) 年の調査と今後の課題

令和 5 年の調査は 3 月末にドローンによる川下チャシの観察、撮影から始まった。この調査では「岡島チャシ」「古潭チャシ」の撮影、調査も同時におこなっている。川下チャシについては、島の南端にある旧教員住宅跡地付近からドローン

を飛ばし、岡島の稜線を北にたどり撮影をおこなった。4 月 11 日には浜益区や「いしかり砂丘の風資料館」のみなさんと現地踏査をおこなった。この踏査では川下チャシまで実際にのぼり現状を確認した。現地踏査時、すでに雪から解放されたササが起き上がり歩行も大変困難で、地上からでは溝の形状やチャシの全体形状は把握できなくなっていた。

図 31 は古潭チャシでのドローン撮影のようす。図 32 は川下チャシのドローン調査風景で送電線の右が岡島、車の向こうに川下市街、愛冠岬がみえる。

図 33 は発進させた直後のドローン画像で奥の高い山が標高 135 m の岡島のピークで、その手前の矢印で示した小さなピークに「川下チャシ」がある。図 34 は国道 231 の覆道の上空から北東向きに撮影した画像である。左隅の屋根が覆道の一部で急斜面が岡島の海食崖断面である。かつてはこの南端付近にも「洞窟遺跡」があったと聞かすが、国道の覆道工事の際、ふさがれたらしい。

なお、岡島南端から「川下チャシ」までは北へ約 280m、川下八幡神社からは北西に約 750m の位置にある。図 35 はチャシの南側からの撮影画像で、頂上にササが楕円形になり、下にも緑の濃い溝がある。図 36 は接近した画像である。この二つの画像から読み取れることは、ササが濃い緑色の二重のラインがみえることである。緑の二重のラインとの間はササが枯れており、茶色になっている。ササの枯れた部分は頂上部にもある。この色の違いは、地下の水分量の違いによるものとみられ、このことから上下 2 本の溝があると考えられる。この 2 本の溝は Google Earth でも確認され、とくに下段の溝は「コの字」形に見える。下の緑のラインの外側は土手状にみえる「土の盛り上がり」で 1 本目の溝を掘った際の排土とみられる。すでに述べた日本城郭大系の「川下チャシ」(藤本, 1980: 133) で「⑥土塁・壕」と記載されているが、「土塁」とはこの「土の盛り上がり」

のことを指しているのかもしれない。またチャシ上段の溝の南端付近にある灰色の格子状のものはテレビ難視聴解消用のアンテナで史跡指定とほぼ同じ時期に建設されたようだ。

図36・37は4月11日の現地踏査の際の写真で下段の溝から上へのぼる同行者の姿であるが、ほとんどササに埋もれている。計測はしていないが下段の溝から上段の溝まで3m以上の比高差があるとみられる。図37・38は図26で示した日本城郭大系の掲載写真の拡大でわずかに上段の溝も見え、上面が比較的平らにみえる。16mm「北海道のチャシ」では画像を静止してみると四角い形状の平坦面が二枚あるようにみえる。

図39に川下チャシの東西断面の想像図を示した。この図のように、このチャシの西側海食崖上にあり、すでに一部崩落しているとみられる。これは国土地理院の航空写真などでも確認できる。川下チャシの平面形は図28, 29, などで分かるように南北に長い「コの字」に近い2本の溝をもつ遺構である。図39・図40は現時点で考えられたチャシの東西の地名断面図と平面図である。とくに図40に緑のラインで描いたよう2本の溝がある遺構とみられる。このラインはすでに第35・36図のドローン画像からみえる。①は最上部の平坦面で②は外周を巡る溝の排土とみられる部分である。

チャシの全体形状は実測していないので正確には分からないが、航空写真や地形等から推測すると「C字」状ではなく「コの字形」に近い2重の溝をもった遺構と推測される。

今後の調査課題

- ① この遺構の構造と詳細な測量図の作成。
- ② このチャシがアイヌ文化の遺構であるのかどうか明らかにする。
- ③ このチャシと伊能図のチャシ地名との関係を明らかにする。
- ④ この遺構が荘内藩陣屋の附属施設で台場であるかどうか明らかにする。



図31. 撮影風景(筆者撮影, 人物は高橋氏)



図32. 川下チャシ調査(筆者撮影)



図 33. 矢印は川下チャシの位置



図 34. 岡島の西面（海食崖）



図 35. 川下チャシ遠景



図 36. 図 35 の接近画像
(注：図 33～36 は高橋氏 2023 撮影ドローン画像)



図 37. 下段の溝と上段への斜面（筆者撮影）



図 38. 日本城郭大系口絵拡大
(藤本, 1980)

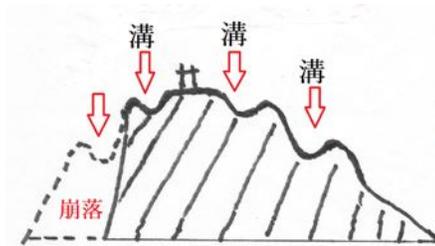


図 39. 川下チャシ東西断面推定図

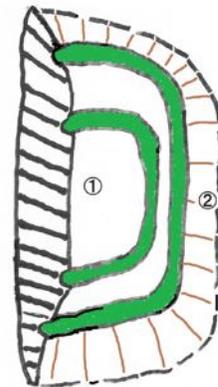


図 40. 川下チャシ平面概念図

謝辞：本報告を作成するにあたり，次の機関にお世話になったので名前を記して感謝申し上げます。国立国会図書館，国土地理院，鶴岡市郷土資料館，北海道大学図書館，早稲田大学デジタルアーカイブ，函館市立中央図書館，石狩市教育員会。

引用文献

藤本英夫，1976. チャシについて(覚書). 北海道考古学第12輯. 北海道考古学会.
藤本英夫，1977. 北海道のチャシ. 日本文化の探究 城，上田正昭編. 社会思想社：165.
藤本英夫・名嘉正八郎編 1980 日本城郭大系第1巻 北海道 沖縄. 新人物往来社：写真15.
藤本英夫，1980. 川下チャシ. 日本城郭大系第1巻 北海道 沖縄. 新人物往来社：133.
福田友之，1980. 岡島チャシ. 日本城郭大系第1巻 北海道 沖縄. 新人物往来社：132.
函館市中央図書館蔵，1849. 西蝦夷道中見取図.
北海道廳，1887. 假製五万分一圖 増毛第十一號 茂生. 国土地理院.
北海道教育庁文化課化編，1983. 北海道のチャシ. 北海道教育員会：11，40.
北海道 浜益村教育委員会，1992. 史跡荘内藩ハマシケ陣屋跡平成元年・2・3年度保存計画事業報告書.
一ノ瀬紀一郎，1854. 蝦夷廻浦図繪(茂生及び岡島の部分). 函館市中央図書館：写真1，56.
国土地理院，2024. 国土地理院古地図コレクションサイト「伊能大図 増毛」.
金田一京助，1961. アイヌの詩曲について. 金田一京助喜寿記念アイヌ文化志 金田一京助選集Ⅱ，三省堂：136.
小林和夫，1980. 北海道のチャシ地名. 日本城郭大系大系1北海道・沖縄，新人物往来社.
河野常吉ほか，1987. 北海道殖民状況報文石狩國. 北海道出版企画センター：149，157.
河野広道，1932. 北海道に於ける洞窟遺跡. 蝦夷往来第九號 書肆，尚古堂：91.
河崎宏太郎，1982. ユーカラのふるさと. 私家版：110-111.

河崎宏太郎，1986. 先住民族の文化遺産『ユーカラ』への慕情. 私家版：15，24.
札幌映像プロダクション，1976. 北海道のチャシ.
杉山壽恵男，1936. 北海道石狩國濱益村岡島洞窟遺跡. 東京人類学会：356.
宇田川洋，2005. 増補改訂アイヌ伝承と砦(北方新書007). 北海道出版企画センター：46-47.
宇田川洋，2006. 増補アイヌ考古学(北方新書003). 北海道出版企画センター：12.
山田秀三，2000. 北海道の地名. 草風館：119.
吉田寿人・石橋源，1971. 浜益村小史. 北海道浜益村：6，21.
吉田寿人，1971. 表紙 浜益村川下史跡荘内藩陣屋之絵図. 北海道の文化20，北海道文化財保護協会.